

昔むかし、ミヴァントン湖このほとりに、ある農夫の屋敷やしきがありました。この湖はとても大きくて、まわりを馬で回つてもたつぷり一日かかりました。

あるとき、干し草の刈り入れが始まるころのことです。屋敷で働く人たちは、みな、牧草地ぼくそうちに出かけていて、主人の農夫だけが屋敷に残っていました。すると、ひとりの女が、こつそり湖から上がって来て、屋敷のとびらをたたきました。農夫が出てみると、女は、

「今夜ひと晩泊めてもらえませんか」とたのみました。農夫は、

「ああ、いいよ。泊まっていくといい。名前はなんていうんだね」とききました。

「ウールヴヒルドルといいます」

「どこから来たのかね」

ウールヴヒルドルは、それには答えませんでした。

夕方、みんなが、刈った草を熊手でかき集めていると、ウールヴヒルドルがやって来て、

「わたしにも、熊手を貸してもらえませんか」といいました。そして、ふたり分の仕事をしました。

あくる朝、ウールヴヒルドルが、また熊手を貸してくれというと、農夫は、

「そんなに働いてもらわなくていいよ。もう家に帰ったほうがいい」といいました。すると、ウールヴヒルドルは、泣きだしました。農夫はしかたなく、その日も泊めてやることにしました。

あくる朝、農夫が、

「さあ、もう行かなくてはいけないよ」というと、ウールヴヒルドルはまた泣き出します。そこで、とうとう、一週間、泊めてやることにしました。一週間が過ぎたとき、農夫が、

「もうこれ以上は置いとけない」というと、ウールヴヒルドルは、またまた泣き出ししました。しかたなく、夏じゅういてもいいと、ゆるしてやりました。ウールヴヒルドルは、よろこびました。

屋敷の人たちは、みんなウールヴヒルドルが好きでした。みんなは、こんなに働き者

で正直な人はいないといいました。こうして、秋になり、冬になっても、ウールヴヒルドルは、農夫の屋敷で働きました。

クリスマスが近づいたころ、農夫の妻が、ウールヴヒルドルに、羊の皮を一枚やって、「これで、あんたと、あんたの手伝いをしている召使たちふたりに、新しい靴を作るといいよ」といいました。ウールヴヒルドルは、ふたりの召使たちに靴を作ってやりました。けれども、自分の靴は作りませんでした。

クリスマスの日、農夫や屋敷の人たちは、みな、教会に出かけました。けれども、ウールヴヒルドルだけは、屋敷に残りました。

つぎの年も、クリスマスが近づくと、農夫の妻が、靴にするといいといって、羊の皮を一枚くれました。ウールヴヒルドルは、召使たちに靴を作ってやりましたが、やはり自分のは作りませんでした。

クリスマスの日、やはり、ウールヴヒルドルは、屋敷に残りました。その晩、みんなが教会から帰って寝静まったところ。たまたま、召使いのひとりが目を覚ましていて、ウールヴヒルドルが、こっそり屋敷を抜けだしたのに気づきました。召使いは、いったいどこへ何をしに行くのだろうと思いました。

三年目のクリスマスが近づきました。農夫の妻は、ウールヴヒルドルに羊の皮をやつてから、いいました。

「今年のクリスマスは、みんなといっしょに教会に行きましょう。牧師さまが、あんたはどうして一度も教会に來ないのかって、おっしゃっていたよ」

ウールヴヒルドルは、それには答えず、やはり召使いたちに靴を作ってやり、自分のは作りませんでした。

クリスマスの晩、みんなが寝静まると、ウールヴヒルドルは、屋敷を抜けだしました。あの召使いは目を覚ましていて、こっそりウールヴヒルドルのあとをつけて行きました。ウールヴヒルドルは、湖のほとりまで来ると、手袋で水の面をたたきました。すると、ウールヴヒルドルは、橋をわたって行きました。たちまち、湖の上に橋がかかりました。ウールヴヒルドルは、橋をわたって行きました。召使いもついて行きました。むこう岸に着くと、ウールヴヒルドルは、手袋で橋をたたきました。すると、橋は消えました。ウールヴヒルドルは、なおも歩いて行きました。召使いもついて行きました。道は下り坂で、地面の下へと続いているようでした。あたりはどんどん暗くなっていきました。長いあいだ歩いて行くと、やがてあたりが明るく

なってきました。そして、とうとう、平らで美しい野原にやって来ました。道の両側は、いちめんに美しい花でおおわれています。牧草地では、黄色いたんぼぽがお日さまにかがやいていました。羊の群れは楽しそうに草を食べています。召使いは、これまでこんな美しい所を見たことがありませんでした。

この野原の真ん中に豪華てうかで美しい館やかたが立っていました。ウールヴヒルドルは、館に入っていました。召使いは、やぶのかげに隠かくれて見えていました。

しばらくすると、ウールヴヒルドルは、館から出て来ましたが、女王のような衣装いしやうをまとい、どの指にも黄金の指輪をしていました。そして、腕うでには幼い子どもを抱おいていました。そのそばに、頭に王冠おうかんをいただき、王の衣装を着けた男の人が歩いていきます。

召使いは、これは王さまとお妃おきに違ちがいがないと思おもいました。ふたりは、館のそばの教会に入っていました、おおぜいの美しい人たちがその後のちに続つきました。

召使いも教会の中に入っていました、とびらのかげに隠かくれました。

そのとき、ミサが始まりました。

しばらくすると、ウールヴヒルドルの抱かかっていた子どもが、ぐずって泣なきだしました。ウールヴヒルドルは、黄金の指輪をひとつ抜き取とって子どもにわたしました。けれども、子どもは、指輪を投げ捨ててしまいました。召使いは、転まがってきた指輪を、こっそりひろいあげました。

ミサが終わると、みんなは教会を出て館に帰かえって行いきました。召使いがまたやぶのかげから見ていると、やがて、ウールヴヒルドルが、もとの服を着て出て来ました。そして、来たときと同じ道をたどりました。召使いもこっそりついて行いきました。美しい野原を過ぎて、道を上あっていくと、湖に着ききました。ウールヴヒルドルが手袋で水面をたたきました。橋をわたってむこう岸に着きくと、手袋で橋をたたきました。召使いは、近道をして走はって屋敷にもどり、ベッドにもぐりこみました。やがて、ウールヴヒルドルが帰かえって来てベッドに入いりました。

あくる朝、農夫の妻がウールヴヒルドルに、

「さあ、今日こそはいっしょに教会に行かなくてははいけません」といいました。すると、

召使いが、

「この人は、もう夜のあいだに教会に行きましたよ」といいました。ウールヴヒルドルは、おどろいて、

「もし、あなたがそれを証明できるんなら、あなたは、人間のうちで一番幸せな人ですよ」といいました。そこで、召使いは、昨夜の出来事をすっかり話しました。そして、その証拠としてあの黄金の指輪を見せました。

ウールヴヒルドルは、たいそう喜んでいました。

「じつは、わたしは、妖精の国の女王です。あるとき、年寄りの魔女とけんかをしたのですが、その魔女がわたしに、これからは、人間の世界にいけないというのろいをかけました。妖精の国に帰って夫に会うことがゆるされるのは、年に一度、クリスマス晩だけです。ただし、のろいがかけられた後、三回目のクリスマスの夜までに、だれか人間の男が、いっしょに妖精の国に来るなら、そのろいは解けることになっていました。わたしは、もしわたしがまほうから救われたら、魔女は死ななければならぬ」というのろいを、魔女にかけていました。だから、魔女は死んだのです」

それから、ウールヴヒルドルは、召使いに向かって、

「あなたは、今からはいつも幸運にめぐまれるようにしてあげましょう。あした、湖のほとりに行きなさい。そこで、さいふをふたつ見つけるでしょう。小さいほうがあなたのもので、大きいほうは、農夫のものです」といいました。そして、やさしい言葉でみんなに別れを上げました。

ウールヴヒルドルは、湖へ下りて行って、そこで消えました。それから、だれもウールヴヒルドルのすがたを見た者はいません、

つぎの日、召使いは、湖のほとりに行ってみました。すると、さいふがふたつ見つかりました。小さいほうには金貨がいっぱい、大きいほうには銀貨がつまっていました。召使いは、生きている限り、いつも幸運にめぐまれたということです。

これで、この話はおしまい

村上郁再話

資料『世界の民話32 アイスランド』谷口幸男／ぎょうせい